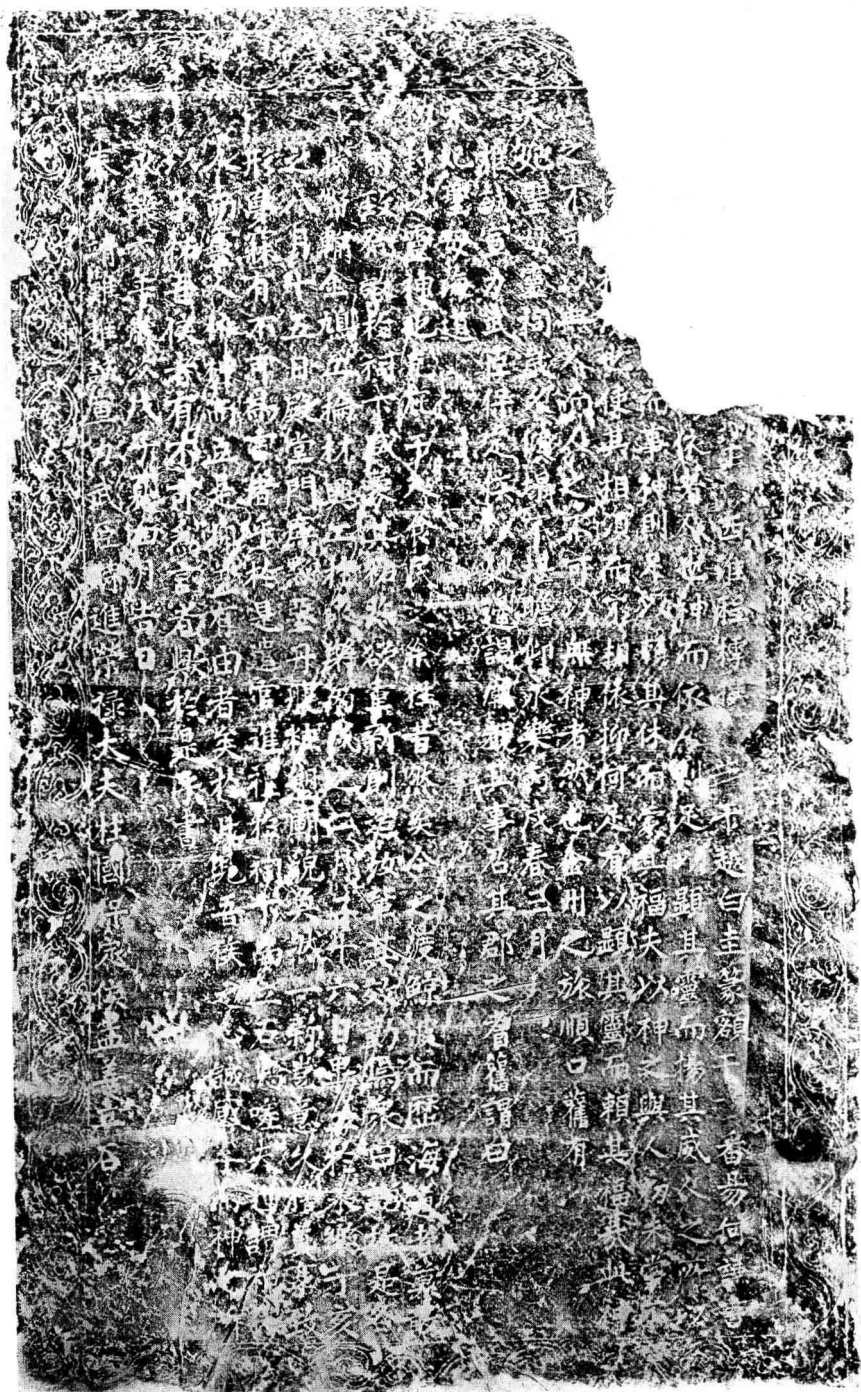


滿洲金石志稿

第
二
冊



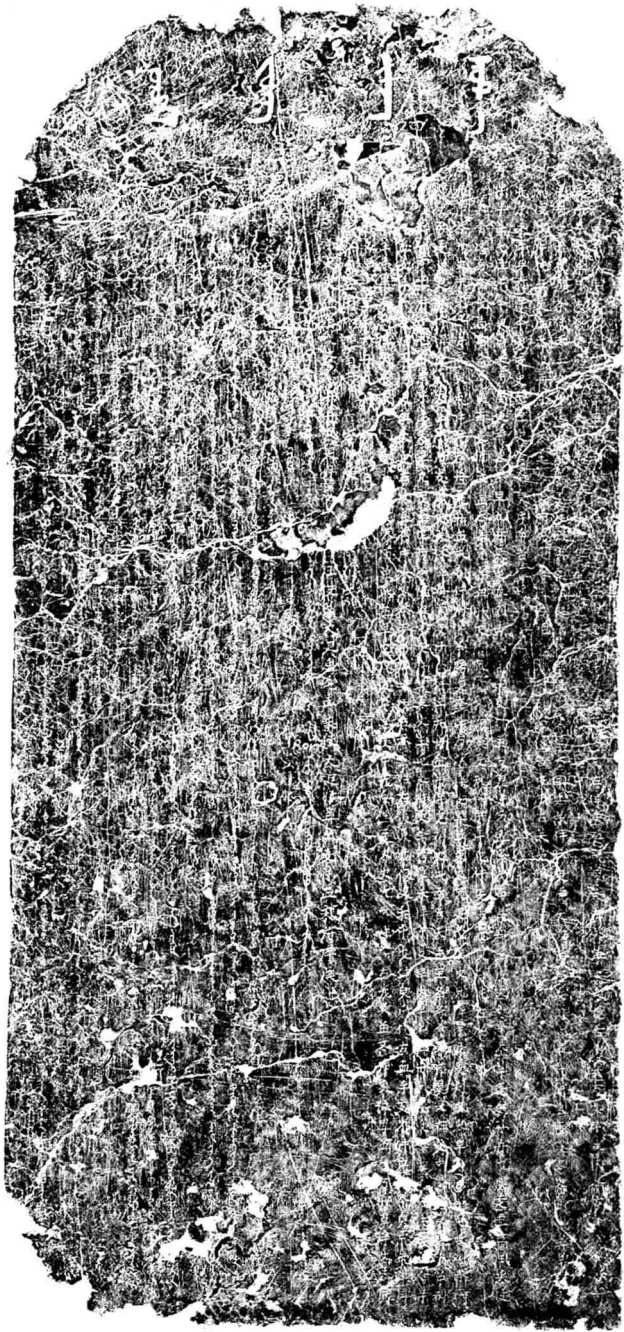
拓碑修重廟妃天·順旅

(建年六樂永)

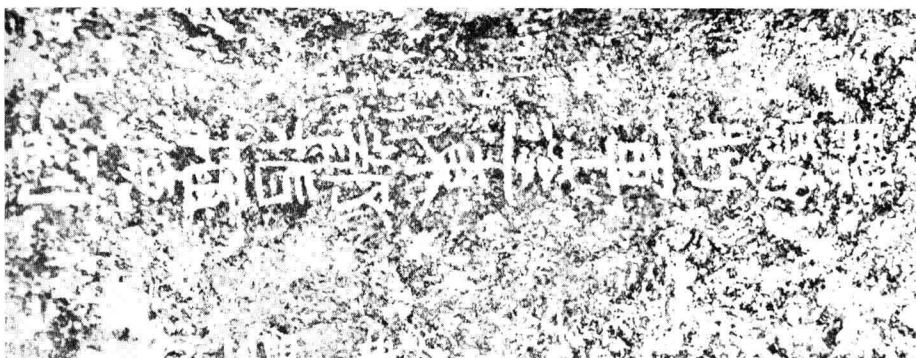


拓碑寺寧永·干兒奴

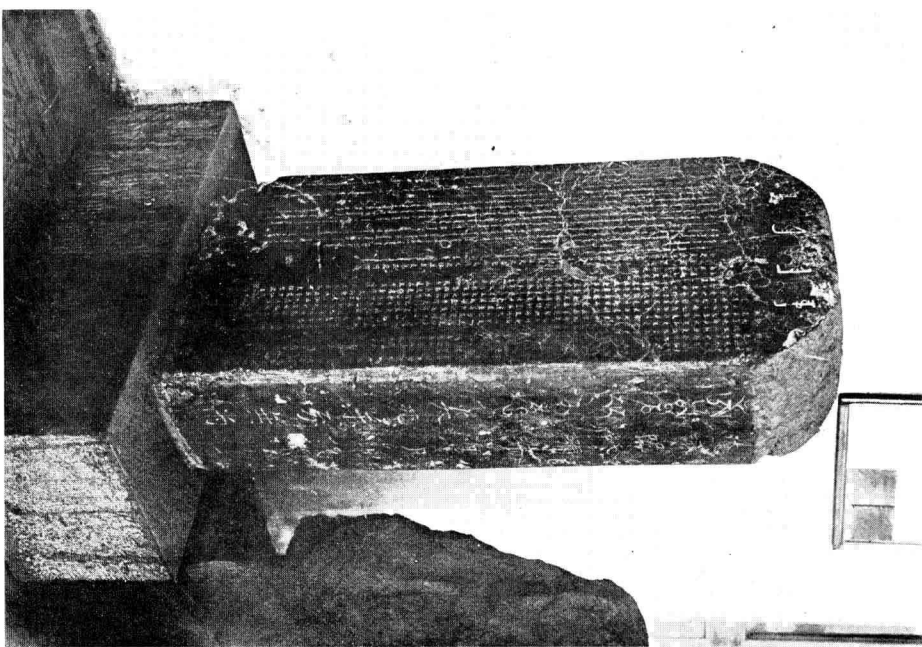
(建年一十樂永)



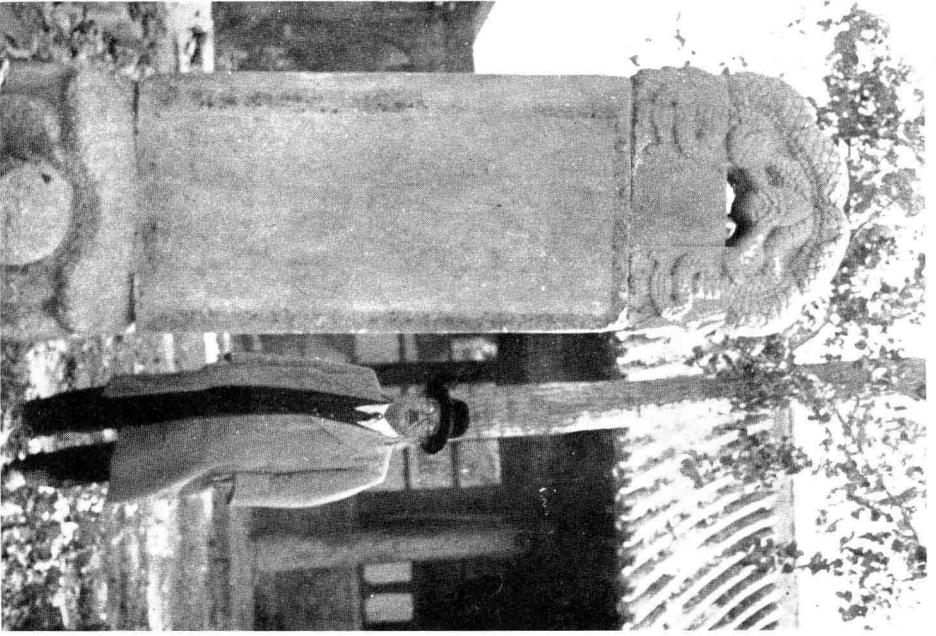
拓陰碑寺寧永·干兒奴



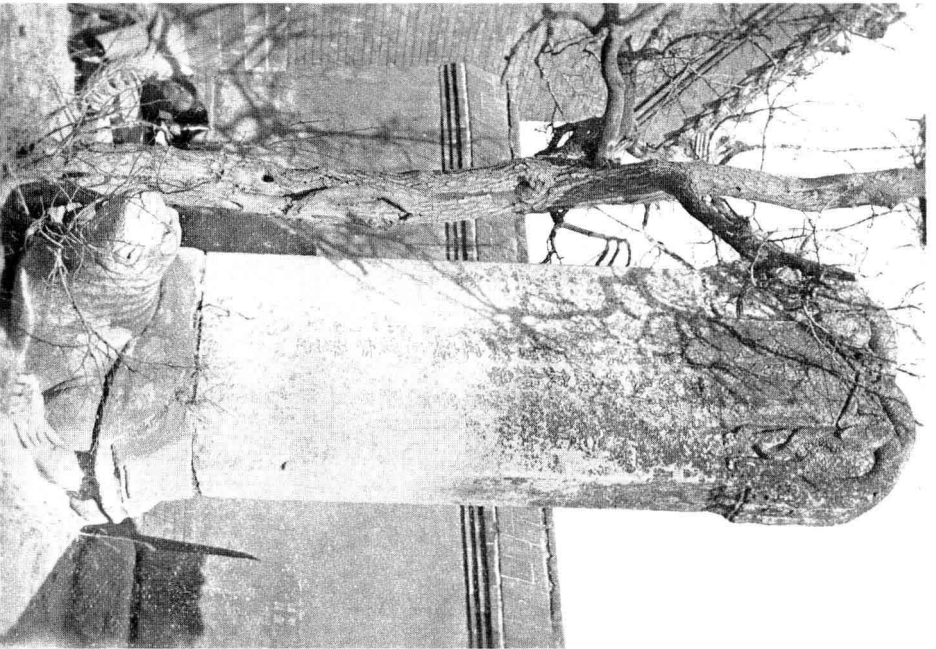
拓名題清劉·達哈什阿
(劉年九十樂永)



碑寺寧永·千兒奴



碑修重寺學三・坡海
(建年十德宣)



碑諭勅祖成廟鎮北・鎮北
(建年元熙洪)

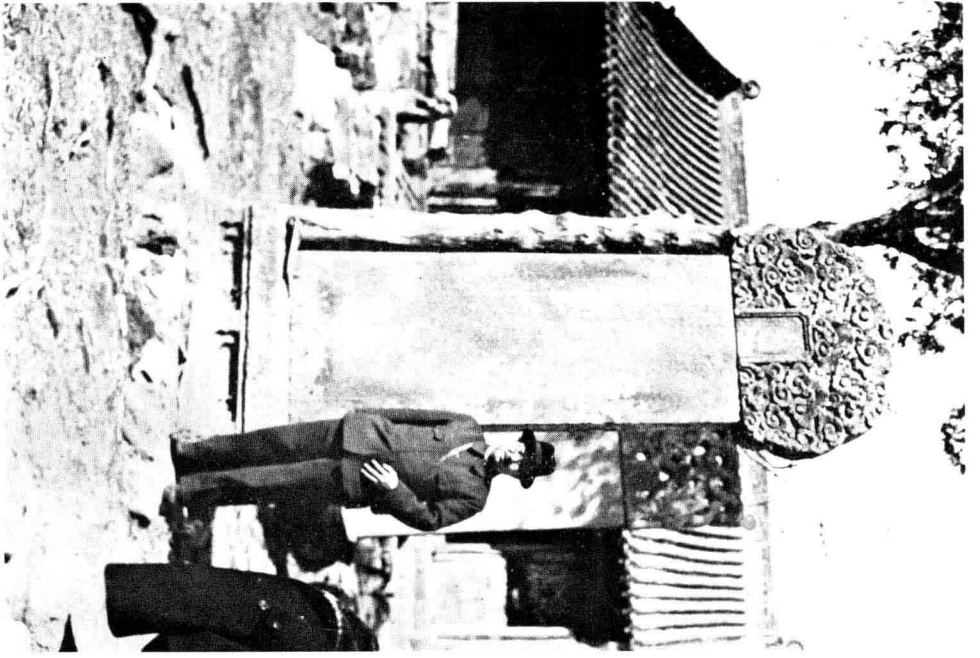


拓碑寺寧永建重·干兒奴

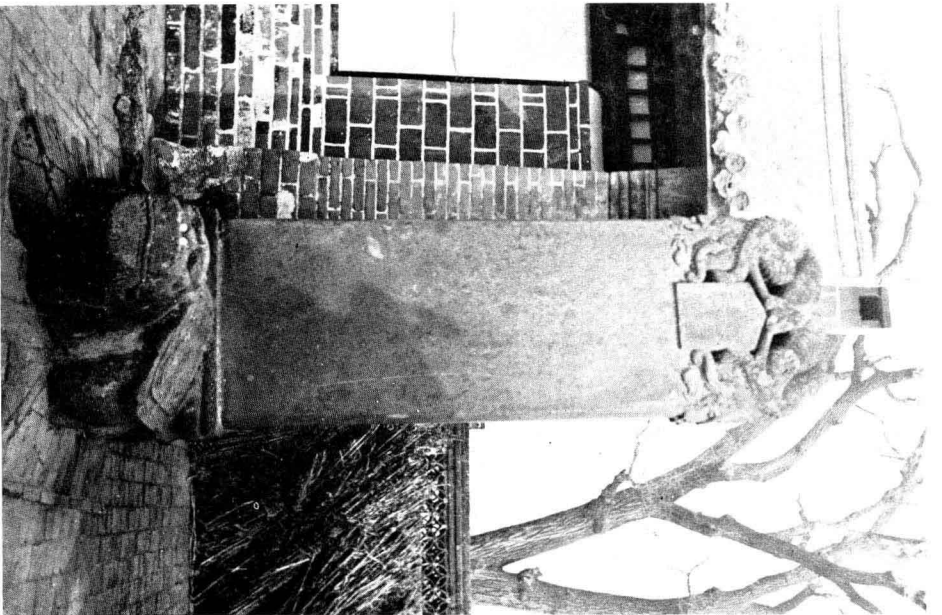
(建年九德宣)

皇帝聖旨朕體
 天地保民之心恭成
 皇曾祖考之志刊印大藏經典頒賜天下
 用廣流傳茲以大藏安置遼東雙塔
 崇興禪寺永充供養聽所在僧官僧
 徒者誦讚揚上為國家祝釐下與生
 民祈福務須敬奉寺護不許縱容間
 雜之人私借觀玩輕慢褻瀆致有損
 壞遺失敢有違者必究治之諭
 正統十年二月十五日

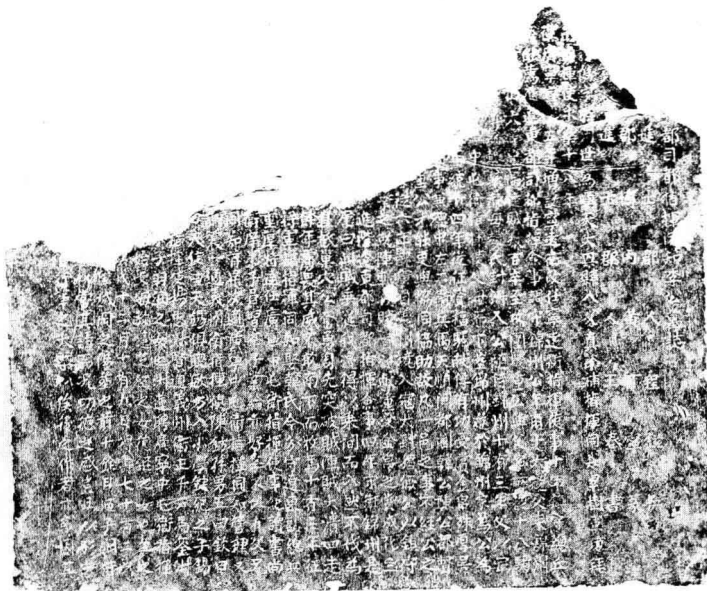
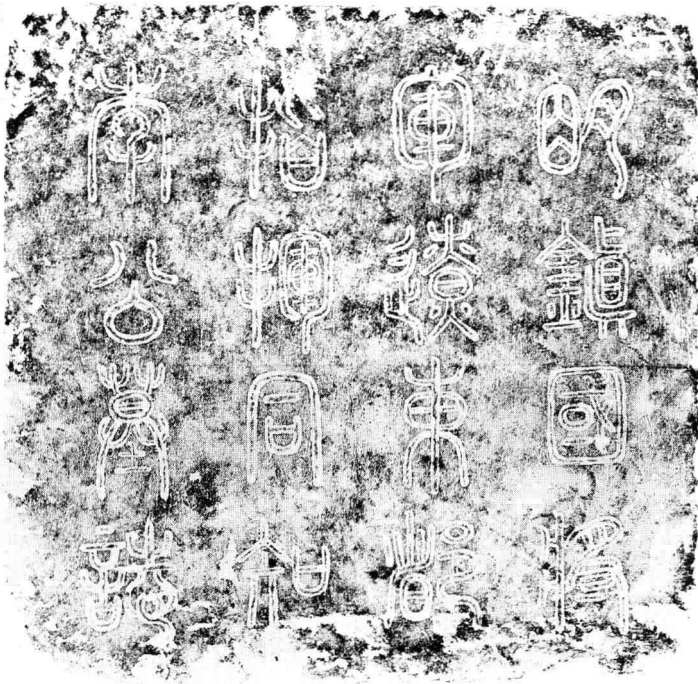
拓碑諭勅經藏寺塔雙·鎮北
 (建年十統正)



(建年六順天) 碑寺涼清·城興

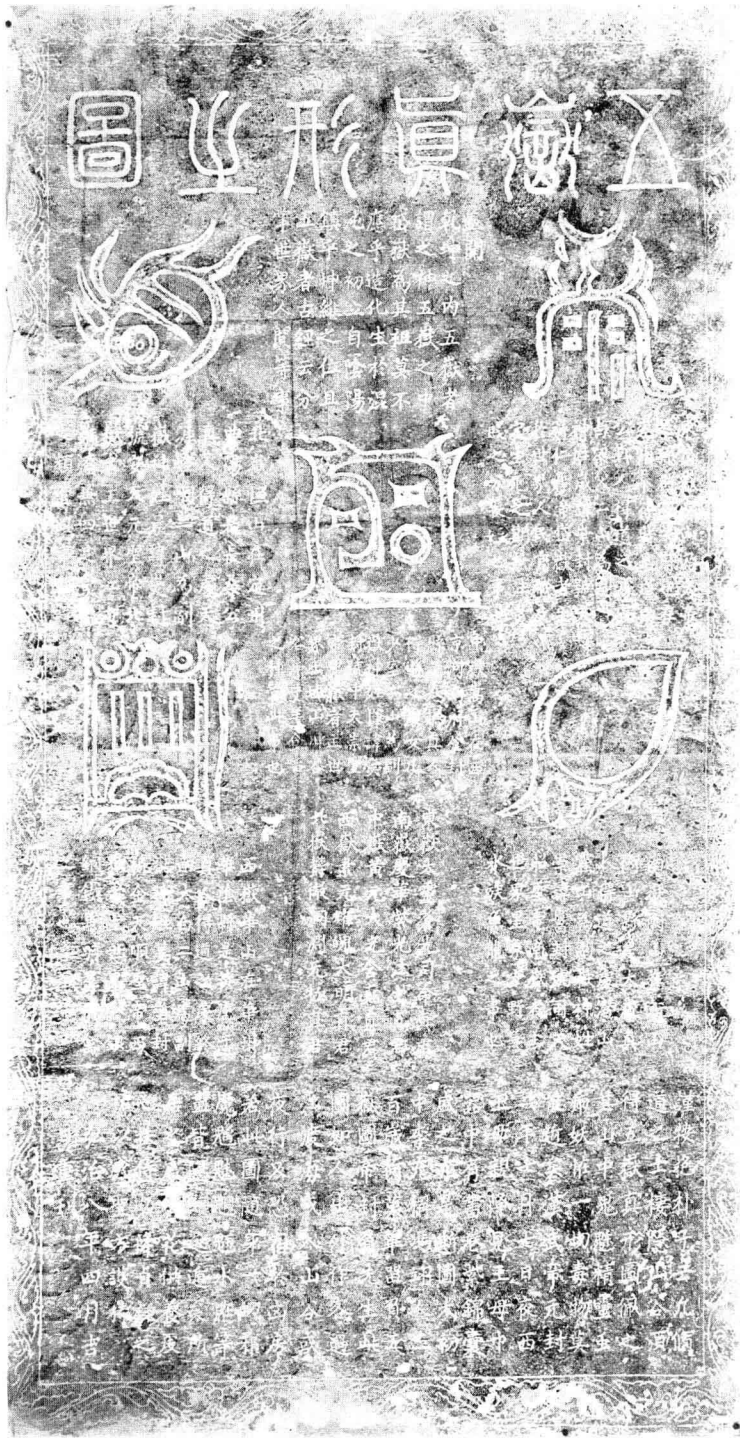


碑廟王關·縣義
(建年十統正)



拓銘誌墓儁李·縣錦

(刻年三治弘)



拓碑圖形真嶽五廟嶽東·鎮北
 (建年八治弘)

考榮祿大夫都督同知李英春侯
妣 一品 夫人 楊氏 合葬

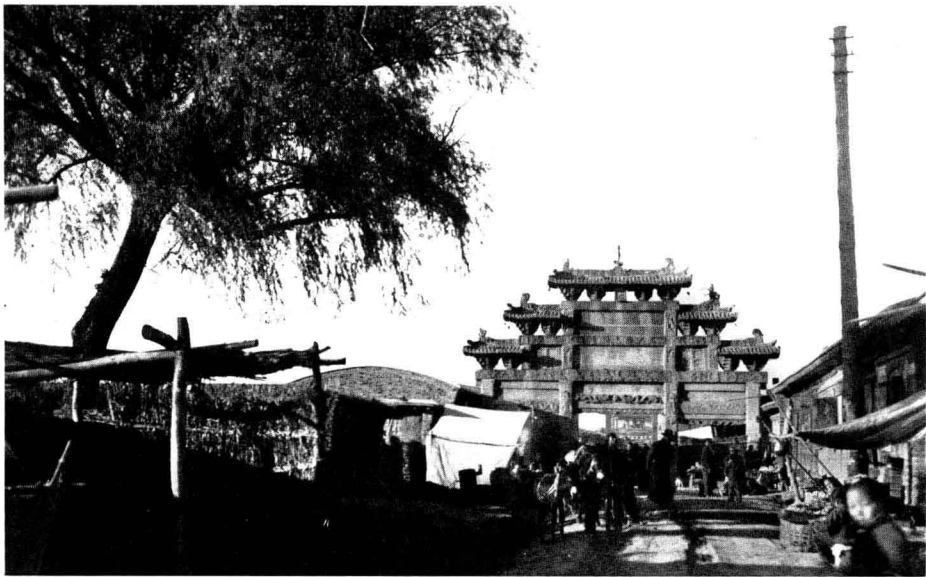
同祖 妣 考昭勇將軍李公英 合墓

碑墓美春李英李·嶺鐵

(?後前年八曆萬)



樓牌功旌梁成李·鎮北
(建年八曆萬)



樓牌功旌壽大祖·城興
(建年一十禎崇)

李得會
 季子謙
 季子強
 劉天義

為西北方土地曆十四年十月初日鑄
 天積粟之令
 欲置任屬助博提督軍務領行東寧縣地方
 每備後總兵軍大傳後太子大傳在右前
 大原兼太子太傅太子太傅太子太傅太子太傅
 欽差鎮總兵軍鎮守陝西總兵官前掛征
 將軍印鎮守廣西總兵官中右兩軍都督府
 念旨督府事都督同知李如聲重修完訖
 萬曆三十二年九月初九日

鐵嶺·圓通寺白塔重修銘拓(萬曆三十六年)



拓額石門堡勝大·縣錦

第五期

明

時

代

序言 一束

一
滿洲金石志稿第二冊茲に成る。去る昭和十二年四月、是書の第一冊を公刊以來既に三年、いま其の第二冊を續刊し得たことは、實に欣快に堪へない。是に因つて滿洲金石文の集成に更に一步を進め得たる次第である。此後第三冊を編纂し、清代及び未集録を補遺し、之を完結する豫定である。

二

滿洲に於ける明代の金石文は、其の時代が比較的、新らしきだけ、相當多數に遺存して居る。是書に収録せる金石文も實は其の全部を網羅せるものではない。此間多少の取捨撰擇を試み、玉石混淆を免れむとせるも、其の件數は遙かに第一冊を凌駕するに至つた。されど是が分布の範圍を觀るに、第一冊が殆んど滿洲全體に亘れるに比し、第二冊は舊奉天省の南部地域に局限されてゐる。之れ第一冊は高句麗・渤海・遼・金の元の歷朝を包含せるに反し、第二冊は當年遼東の一隅を領有せる明朝の金石文として當然の事であらう。實際のところ、明代の滿洲は東北に女真人・西北に蒙古人あり、所謂東夷北虜として東西に割據し、明朝政令の及ぶところは開原を極邊とする邊牆迤南に限られてゐた。東は寬奠・